

第38回全国中学生人権作文コンテスト愛知県大会最優秀賞

「知る」努力と人権侵害

県立一宮特別支援学校中学部 三年 佐々木 杏夏

世界中の全ての人が人権を持っている。そして、差別や偏見は度合いに関わらず、紛れもない人権侵害である。そのことを踏まえた上で、それを防ぐ方法を考えていこうと思う。

まずは、私を知ってもらいたい。私は今、中学三年生だ。脳性まひという障害がある。歩くことが難しいので、現在は特別支援学校に通っている。小学生までは、地域の小学校にある特別支援学級に在籍していた。私はできないことが多かったので、色々な支援をしてもらっていた。楽しいこともたくさんあった。しかし、そんな中、私が毎日頃感じていたのは、自分がいわゆる普通ではないということだ。時々ふとどこかに壁を感じることもあった。例えば、小学校の終業式の日。クラスメイトや下級生でさえ、その日特有の大きなかばんを重そうに持っていた。それに比べて私は、車イスを押してもらいながら帰っていた。荷物も車イスにかければ、私は手ぶらだった。当然、クラスメイトからは「良いな楽そうぞ。」と言われた。座り続けることは、かなり辛いもので、身体もよく痛くなる。そういう面での辛さを知らない相手の言葉には、やり場のない気持ちがわいてきてしまう。それに私もできることなら、重い荷物を持ってでも、友達と長期休みの予定を話しながら帰ってみたいと考えていた。

当時は分からなかったが、今思えばこの考え方の差を作ったのは、私とクラスメイトの間にあった「知らない」という壁だったと思う。私にはできないことが多いのが普通だったから、障害のない人やできて当たり前の人々の気持ちは分からなかった。今でもきっと分からないと思う。ちょっとした言動に傷ついたこともある。ある人が私への質問を母に聞いていた。その時私は、母と二人で外にいた。目の前の私をしっかりと見ていたので、確実に目は合っていたのに。母は困ったように私を見た。あわてて私が答えると、その人は少し驚いて「あれ、しゃべれるんだ。」と言った。それに悪意がなかったと分かったのは、最近のことだ。クラスメイトやあの人とも、障害のある人と関わることもなかったために私のことがよく分からず、こういう言動になったのだろう。

知らないというのはそれだけで怖いもの。誰でも、それまで存在すら知らなかったものに近づくのは勇気がいるだろう。だから、皆身を守るために、知らないものには心の壁をこしらえて、更に距離を置く。お互いを壁で遮っているのに、更にまた距離を置いているとなれば、分かり合えるはずがない。分かり合うためには、この壁を取り払って、距離を近づける必要がある。

私は、差別や偏見は、お互いを十分に知らないことで生まれると思う。だから、まず知る努力をしたい。あの「知らない」という壁を打ち破るためだ。しかし、身構える必要はない。知る努力はそんなに難しいものではない。インターネットで調べる。本を読む。漫画を見る……。手段はたくさんある。自分がなじみやすい方法を見つけ、知るきっかけを作る努力をすることが大切なのだ。

私にとっての「知る」きっかけは、特別支援学校に入学したことだ。環境が変わり、今まで経験してきた辛いことや悲しいことがさほどたいしたものではなかったと気づき、き

ちんと「経験」としてとらえられるようになった。小学生の頃の悩みだった「意見が言えない」ことも、機会がなかっただけのようで、今となっては笑い話だ。他のことでも、以前のように相手からの反応を待っている消極的なものではなく、自分から意見を言い行動するような積極的な過ごし方を見つけられたと感じている。これはささいなことかもしれない。しかし、かつての自分は数年後の自分が人権について考えたり、生徒会に関わるような人になるとは思いもよらなかった。もしこのきっかけがなければ、今の自分はなかった。

今、もし小学生の自分にアドバイスができるとしたら、「周りを見て、知ろうとしてみよう」と伝えたい。小学生の時に傷ついたのは、知らなかったから。人見知りの私が、中学で変わったのは、人と関わるために初めて「知る」努力をしたから。これは障害者差別だけでなく、全ての差別に言えることだと思う。

知るという努力をするだけで、少し距離を近づけるだけで、差別や偏見をなくすことができる。これが、今の私が考える人権侵害を防ぐ方法だ。